

学校評価報告書

横浜市立新鶴見小学校

重点取組分野	令和元年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①基礎・基本が身に付くように、既習を活用した授業づくりやスキルタイムを実施する。 ②子どもが主体的に学習を進め、自分の言葉で表現する力をつけられることを大切にして、教材研究を共同で行う。	①学習の系統性や既習事項を教師自身が再確認し、授業づくりに生かした。習熟度に応じた支援を心がけることにより、基礎・基本の定着が得られた。②子どもの興味関心、思いを基に学習課題を設定した。体験的な活動を取り入れ、自分の考えを言語化できる場面を意図的に設定することで成果を得た。	B
豊かな心	①学級や学年、異学年集団における行事や集会、活動の価値について職員間での共通理解を図ることで、子どもが人とのつながりを感じ、互いに認め合える集団作りを目指す。 ②重点研究によって支援の在り方を追究し、道徳の時間を中心とした道徳教育の充実化を図る。	①ペア活動を中心に異学年での子ども同士の交流は増え、低学年は安心する姿、高学年は責任感をもって行動する姿が見られ。集団としてよくなったと感じられる。②重点研究では、道徳を中心に実態に合わせた支援を行い、児童の自己肯定感が高まってきた。	A
特別支援教育	①不登校児童、学習支援児童に関しては、職員での共通理解を行い、たくさんの先生がチームになって支援していく。 ②療育、特相、区役所、児相、カウンセラーと連携して、子どもが安心して過ごせる環境を作る。	①配慮を要する児童については、全職員で共有することができた。チーム対応を基本として対応に当たったが、担任の役割分担や支援教員の確保に課題が残った。②特総、療育、区役所、児相、SCとともに、警察やSSWとも連携を図り、子どもたちがよりよく過ごせるための対策を話し合い、実践に移した。	B
地域・保護者連携	①学習ボランティアや「ととかか」、スクールパートナー等、保護者や地域の人材を活用し、子どもたちの体験的学習の充実を図る。 ②学習活動や地域行事への参加を通して、子どもたちと地域とのかかわりを深めていく。	①ボランティアやスクールパートナー、外部講師などいろいろな方と関わりながら多くの体験的活動を行うことができた。ただし、連携の部分では課題も残った。教育的ニーズを明確にして話し合い、計画を立てていく必要がある。②お祭りや文化祭など、地域行事のボランティアに参加し楽しむ子どもの姿が多く見られた。	B
人権教育	①人権週間を中心とし、人とのつながりの中から子ども同士が認め合い、自分も他の人も大切にできる取り組みを学級で行い、また学んだ事を掲示して共有していく。 ②授業参観で年間1度は道徳の授業を行うなど、心の教育の実践を保護者にも理解啓発していく。	①今年度からSDGsを用いて共通のテーマで取り組んだ。テーマを共有することで、学年ごとでも連携し、学びを深めることができた。来年度も続けていけるとよい。②道徳の授業参観で、親への教育について啓発することができた。家庭へお知らせを出す学年もあり、今後も共有していけるとよい。	B
いじめへの対応	①いじめの未然防止のために、児童に関する組織的な情報共有やいじめアンケート等の取組を実施する。 ②いじめやいじめにつながる案件について、基本方針に則り、迅速かつ丁寧に組織的な対応を行っていく。	①計画的な児童アンケートの実施が、いじめの未然防止につながっていた。些細なことも見落とさず、丁寧に児童の聞き取りを行ったことが効果として表れていた。②いじめにつながる動きを察知し、迅速に対応していくことができた。管理職を含めた関係職員と共有し、組織的に対応することもできていた。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①定期的に主任・主幹会を設定し、校内の課題を持ち寄り解決方法を見出しながら、学校運営の改善や働き方改革につなげていく。 ②メンターチーム研修の自発的な取組を学校全体で支え、学習指導・児童支援の実践力向上を目指している。	①現状や課題について情報の共有を目指した。そこで話し合われたことは確実に全体で共有できていた。学校運営においても、実態に沿った改善が少しずつ積み重ねられていることが感じられる。②意欲的に研究する姿が見られた。今後は学校全体で支えていくという全職員の意識づけが望まれる。	B
ブロック内評価後の気付き	小中連携の取組が充実しており、年間3回の授業研究会(授業公開を含む)や合同研修会、中学1年生の情報交換会を行い、学校間・教員間の連携を図ることができた。9年間で育てる子ども像「輝く未来を切り拓くたくましい子」の共有ができており、それに向けて各教科での取り組みを模索している。今後、9年間を見通した学習指導のあり方をさらに追求していく必要がある。		
学校関係者評価	道徳科教育やペア活動などの取組により、「豊かな心の育成」についての学校評価が上がっていることは今年度だけでなく継続して力を入れてきたことの成果だと言える。子どもたちの様子を見てみると、学力や体力の二極化が伺える。自分で経験することを通して学ぶことも多くあるべきだが、実際には経験値は高くなく、想像力の欠如にもつながっているように思う。子どもと体験を共有するなど、家庭がしっかりと担うべき部分も学校に任されているところもあるのではないかと感じている。学校と家庭、地域が連携して子どもたちを育てていくという意識が必要である。「何のために学ぶのか」という本質を理解し、学ぶ楽しさを実感してほしいと願っている。		
中期取組目標振り返り	前半5分野の具体的取組は、計画通りに行うことで成果も概ね得られた一方、課題も明らかにできた。「確かな学力」「特別支援」「地域連携」での上記課題を共有して組織として取り組んでいく。また、本校の児童の「体力向上」に向けた課題も明確になったとともに、運営改善を通してそれに資する取組も皆無になったため、次年度は新たに重点取組分野として「体力向上」を加えていく。大きな成果として上げた「ペア活動」は引き続き、本校の特色ある取組として、子どもたちの健全な心の育成と望ましい集団づくりに向けて取り組んでいく。また「いじめ対応」や「人材育成」も、安心安全な学校づくりや学校組織力の向上に向けて取り組んでいく。		

